

タイトル：

神経障害性疼痛が疑われる患者への疼痛改善に向けた薬剤選択の適正化の試み

発表者：

○河村 尚史¹⁾、森 健太郎¹⁾、牧田 和也²⁾、福田 沙耶香²⁾、泉 賢人³⁾、谷口 勝士⁴⁾

総合メディカル株式会社 そうごう薬局対馬中央店¹⁾、豊玉店²⁾、いづはら田湊店³⁾

総合メディカル株式会社⁴⁾

本文：

【目的】

神経障害性疼痛の薬物療法は、痛みの発生機序が異なるため、神経障害性疼痛ガイドラインにおいてはNSAIDsではなく、三環系抗うつ薬、Caチャンネル $\alpha_2\delta$ リガンド、麻薬性鎮痛薬などが治療薬として推奨されている。しかし、NSAIDsを長期服用している慢性疼痛患者の中には、神経障害性疼痛が疑われる例も散見される。その理由として、痺れなどの痛みの症状を正確に医師へ伝えられていないことや、症状改善に対する諦めなどが推測される。そこで今回、薬剤師が該当する患者へ詳しく症状などの聞き取りを行い、医師へ情報提供することで神経障害性疼痛の治療薬への処方変更に繋げ、患者の疼痛を改善するための取り組みを行ったので報告する。

【方法】

2014年4月から1ヶ月間にそうごう薬局4店舗に来局し、内服または外用薬でNSAIDsを3ヶ月以上使用しており、かつ神経障害性疼痛ガイドラインにおける推奨薬を処方されていない患者を対象に、神経障害性疼痛に特徴的な症状の有無、医師への相談の有無、痛みの種類や強さについてアンケート調査を実施した。そこで、症状があると答えた患者についてメーカーパンフレットを利用して神経障害性疼痛に関する情報提供を行うとともに、医師へ相談していなかった患者については主治医へトレースレポートを提出した。その後、医師へ情報提供をした患者について、処方変更の有無及び変更のあった患者の疼痛の改善状況を調査した。

【結果】

アンケートに答えた140名中、神経障害性疼痛に特徴的な痛みがあると答えた患者が21名いた。そのうち医師に相談できていない11名の患者について主治医へトレースレポートを提出したところ、4名に対してガイドライン推奨薬が新たに処方され、薬剤変更後1~3ヶ月のうちに、4名すべての患者において疼痛改善が見られた。

【考察】

今回の調査で、NSAIDsを漫然と使用している患者の中に神経障害性疼痛が疑われる患者が潜んでいる可能性が示唆された。また、薬剤師が患者の症状を詳しく聞き取り、その情報を医師へフィードバックすることで、慢性疼痛患者の疼痛改善に繋がる薬剤選択の適正化に寄与できたと考えられる。今後も薬剤師が医師と患者の架け橋になることで、ひとりでも多くの患者の疼痛改善に貢献していきたい。

【キーワード】

神経障害性疼痛、疼痛改善、情報提供、薬剤選択